
召喚狼=サモンウルフ=

かつを

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚狼ⅡサモンウルフⅡ

【Nコード】

N2513E

【作者名】

かつを

【あらすじ】

遙か未来の話。主人公赤沢ツバキは、この世の中についていけないで居た。そんな彼に忍び寄った、ひとつの影…

第1話 契約

サモナーズスクール。

そこは地球上に眠るありとあらゆる物に命を与え、
そして、生物を操り、

召喚師としての素質を確かめるための学校。

この学校は現在からは考えられないほどの遠い未来の話である。
ある時、ある日本の学者が、物に命を吹き込む実験に成功し、
日本の環境・経済・貿易など、さまざまな役割を果たすことができた。

この便利な力を独り占めするわけにはいかない。
みなに伝えて、日本を変えるのだという試みで、
この召喚を日本中の人々が使えるようにするために、
すべての学校がサモナーズスクールとなった。

その中にもやはり現代と同じように、優等生もいれば劣等生もいる。
では今回はその劣等生の話である…

「ではこれから試験を開始する！番号1！赤沢ツバキ！」
藤岡先生の大声と共に、体育館で召喚獣実技試験が始まった。

…かに思われたが、

「せんせー、赤沢くん今日休んでますー」

生徒の一人がそう言うと、

「んなぁあんだとおおお？サボリかぁ！…ふん、まあいい。

落ちこぼれは落ちこぼれていればいいのだ。

では、番号2！井川鏡！」
いがわきょう

「うーす。」

と、番号1の赤沢を飛ばして、井川のテストが始まった。

「では、井川。お前の召喚獣を見せてみる。」

「はい。」

そういうと、体育館の中は静まり返った。

「天より出でし、鏡の精霊ミルザム。その輝きの元に、全てを跳ね返せ…！」

そう言うのと、天井の方から、大きな鏡を持った天使が現れた。

「ふむ。それが、お前の召喚獣か。ではこちらもいくぞ！」

そんな過酷な試験が行われている間、番号1は家でゴロゴロしていた。

「んゝ暇だなあゝ」

ツバキが呟くと、

「あんたは学校に行きなさい！」
と母にしかられた。

「いいじゃん。俺は落ちこぼれなんだから。」

「よくありません！あんたは努力してる風に思えないけどね！」

そう言われたツバキは反論した。

「なんだと！？俺はどんなに頑張ったって召喚獣が呼べないんだよ！
いくら頑張ったって無理なんだ！」

そう怒鳴り返すと、母は黙り込んだ。

「ふ…ふん！そんなもの…俺には関係ないんだ…！」

そう少し涙ぐみながら言って、家を出た。

「YOU WIN！」

格闘ゲームでお金をだいぶ使ってしまったツバキは、ゲームセンタ
ーを出ることにした。

外では、道路を車を元にして作られた、召喚獣に乗った人々がいる。

売店では、召喚獣のエサなども売られるようになった。

「俺は一生、昔の人間のままなのかな…」

考えたら、泣けてきて、悔しくて走り出した。
とにかく走った。泣いてもわからない場所に。誰もいない場所に。

結局、たどり着いたのはこの川だった。

家からはそこそこの距離がある。人は誰も住んでない。

ツバキはいつも、召喚が出来ないことで苛められて、学校では我慢して、

誰も知らないここで泣いて、家に帰る。そんな毎日を送っていた。

「って…何考えてんだ俺…」

そんなことを考えてたら、泣けてくるのに…

「ちくしょ…ちくしょー！！！！」

泣きながら叫んでた。声が枯れるくらいに。

…もう帰ろうと思った矢先だった。

「いてっ」

川原でこけてしまった。右手をついてしまったので、

右手の手のひらから血が出ていた。

「あーだるいな…血か。なんだかひさしぶりだな…血出たの。」

彼は人生でほとんど血を出したことはない。

この回想はまた後^{のち}に入るので、事実だけを頭の片隅に置いてほしい。

「…血。なんだろう…？この不思議な感じ…」

血…だ…

！

「誰だ…？」

誰かが何かを言った。…血？

やっと…血を…流した…

気がつくとその血は地面にたれ落ちていた。

俺と…契約…しろ…

「なんだと？契約？」

俺は…召喚獣…お前は…契約する…ことで…

「お前を呼べるのか…？」

ツバキはなにがなんだかわからなかったが、尋ねてみた。

ああ…そうだ…契約…しろ…！

なんだか知らないがこれはチャンスだ。

これで俺は召喚獣を呼べる…

もう…落ちこぼれなんて言われないんだ…！

「俺の全てを捧げよう！降りて来い！」

我が名を…呼べ…

我が名は…

ウ…ル…フ…！

「来い！ウルフウ…！」

稲妻のような物が見えた。

ツバキの右手に刺さった。

「んぐ…ぐわあああああああつ！…！」
叫びながら、倒れた。

川原は赤い光に包まれた…

光が消えた。

僕の右手の甲には、

狼の紋章が刻まれていた。

彼が手に入れた力はどんな力なのか…

そして、彼は召喚師になれたのだろうか…

続く。

第2話 呼び出し(前書き)

更新はローペースです。

ご了承ください。

それでは本編をどうぞ。

第2話 呼び出し

「…」

無言で帰宅したツバキはすぐに自室に入った。

「どんな気分だ、ツバキ」

ウルフにそう聞かれると、

「最高だよ…味わったことのない感覚だ…」

「とにかく今日は寝る。明日には再テストあるんだろ」

ツバキは心の中を読まれたようで驚いた。

「な…なんでテストのこと知ってたんだよ！」

「俺はお前と同調したんだぞ？それくらいわかって当たり前だ」

ツバキは同調の意味がわからなかった。

「同調ってどういう意味だ？」

ウルフはやれやれという顔をして説明を始めた。

「同調というのは召喚獣を操るときの方法の一つだ。

種類として、操作・装着・同調の3種類がある。

操作は、後ろから召喚獣を操作して戦う方法。

装着は、自分の体に召喚獣を変形させて合体し、戦う方法。

そして、同調は召喚獣を召喚師の体に憑依させ、

召喚獣と召喚師の2つの心を1つにして戦う方法。

どうせ、学校で勉強してないからわからないだろうがな」

そう言われたツバキは顔を赤くし、そのままベッドに入って寝てしまった。

「オラ起きやがれこのクソヤロー！！！」

次の日の朝、ウルフの罵声で目が覚めた。

「うるさい！もうちょっと静かに起こしてくれよ！」

ツバキはすぐに眠気が失せた。

「とにかく！早く着替えて学校行きやがれ！」

全く…もうちょつと寝かせてくれてもいいのにといいながらいつもの制服を着たのだが、

「おい、そんな服で学校行つてんのか？」

「うん、そうだけど…」

そう言つた途端、ウルフはまた叫びだした。

「バツカヤロオオオオ！！！！こんな地味な服でよく過ごせるなあ！！！！！」

「うるさいウルフ！じゃあ何を着ればいいんだよ！」

「赤だ！真赤赤まっかっかのコート！！それに尽きるぜ！」

俺はブツブツ言いながら押入れを探した。

すると、赤と黒のコートがなぜか、あつた。

「あるじゃねーか、それでいいんだよ。」

ザワ…ザワ…

ツバキはそんなに目立つ存在では無かったが、さすがに注目を浴びた。

制服を着る学校で、真赤赤のコートを着て、肩に狼を乗せながら歩いているのだから。

「なんかお前目立ってるなあ」

ウルフが喋ると、周りも「喋ってる…」と小声で会話していた。ウルフが睨んだ。

「珍しいのか？同調型の召喚獣」

「さあね。俺は昨日まで召喚獣にこれっぽっちとも興味なかったしと、親指と人差し指でゴマでもつまむような手をして言った。

「頭も悪かったしな」

ツバキはむつときたが、堪えた。なぜなら…

「こうらああああ！ツバキ！！何をしつとつたんだお前は！！！」

藤崎だ。もう勘弁してくれ。

「しかもその格好はなんだあ！？まるでセンスのない！」

その言葉に後ろに隠れていたウルフの怒りゲージが一気に100%まで上がった。

「なんだと！？俺のセンスを疑うとはいい度胸じゃねえか！」

藤崎は少し驚いた。

「なんだこいつは…誰の召喚獣だ？…しかも、同調型とは物好きな…」

「俺の…ですけど…」

小声でツバキがそう言う

「お前のだと？ありえん！ハハハハ！笑わせてくれるわ！」

「じゃあ試してみますか？」「じゃあ試してみるか？」

ツバキとウルフは同時にそう言った。

「フン！面白い！かかって来い！」

体育館。

「私から行かせてもらおうか。」

まわりは生徒たちで溢れていた。

「先生とツバキじゃ話にならないだろ」

そんな会話の嵐の中、2人だけが違う会話をしていた。

井川鏡と鈴離レイ（すずひなれい）である。

「これまでの力差では、ツバキは負けるに違いない」

「でも、私はあの子に賭ける。ジューズ1本でどう？」

冷静な正確の鏡に対して、レイは陽気だった。

「先生の力は本物だ、まずツバキじゃ勝てないだろう」

「でも、勝ったんでしょ？」

「あれは試験だった。あと、先生は俺の召喚獣を知らなかった。」

「先生の召喚獣は知り尽くしていた…と？」

「大地の源より出でし、土の巨人・アースゴーレム。その腕力で、全てを叩き潰せ！」

「アースゴーレム。」

人間とは比べられないほどの大きさを持ち、肩に乗って操作する。攻撃速度は遅いが、本気を食らえば、体の原型すらも残らない。」

「あら、さすが優等生。」

「なめないでくれるか。」

そんな会話のなか、視線はツバキの召喚獣に移った。

「どうした！早く出せ！」

「じゃあ、まずナイフで自分の掌を斬れ。」

ウルフはツバキに説明した。

「え！？いやだよ！怪我するだろ！」

「うつせえ！そうしねえと呼べないんだよ！」

ツバキはしぶしぶ、掌を斬った。血がにじむ。

「そして、こう言うんだ。」

「ブラッディゲート、サモン、ジ、ウルフ！」「ブラッディゲート、サモン、ジ、ウルフ！」

ツバキは右手を出し、そう叫んだ途端、消えてしまった。

「ど…どこへ消えた…」

鏡は見失ったが、

「あそこ、先生の後ろ」

レイには見えていた。ゴーレムの後ろでうずくまっていた。「こんなものか。」

そうツバキが言った時、ゴーレムが音を立てて崩れだした。

「まさか…」

「あんな一瞬で、あのゴーレムを？」

「ふん！泥人形なんぞ、俺の敵でもないわ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2513e/>

召喚狼=サモンウルフ=

2011年10月4日15時47分発行